

両山寺護法祭の変容

新名 大介

(手塚 恵子ゼミ)

目次

- I 初めに
- II 護法祭
 - 1 護法祭とは
 - 2 両山寺について
- III 祭事の調査
 - 1 令和4年度における両山寺護法祭
 - 2 これまでの護法祭
- IV 護法祭の変化
 - 1 過去の護法祭との比較
 - 2 先行研究
- V 終わりに

I はじめに

令和元年に発生した新型コロナウイルス感染症の流行により日本各地の祭事でも様々な対応を迫られ、それに伴った変化が発生している。

民俗探究プログラムが調査を行っている亀岡祭においても、新型コロナウイルス流行の影響から、山鉦巡業の中止やルートの変更など様々な変化があった。

本論文で取り上げる両山寺の祭事である護法祭においても、亀岡祭と同様に、新型コロナウイルス流行に伴って祭りの変容を余儀なくされているのではないだろうか。

一方、最初の調査を行った際に、両山寺住職から護法祭に変化はないと伺った。

そこでコロナ禍の変化も含め、ここ3、40年の間で護法祭にどのような変化が生じているのかを調査し、実際に変化は生じているのか、また変化があるとすれば両山寺ではそれに対してどのような認識を持っているのかを明らかにしたいと考えた。

調査の対象として護法祭を選んだ理由は、私が

幼少のころから護法祭に何度も訪れたこともあり、また母方の家が護法祭を行う両山寺の檀家であったからである。

II 護法祭

1 護法祭とは

護法祭とは、毎年盆の時期に岡山県久米郡下のいくつかの寺院で行われる、天下泰平、風雲順時、五穀成就、万民豊樂を祈願する行事である。この行事は建治元年、1275年頃から始まったと言われており、護法実と呼ばれるひとりの男性に、修験者らが「護法善神」を祈り憑けることによって憑依させ、憑依された護法実が「お遊び」「御法楽」と呼ばれる深夜の山岳寺院の境内を疾走、跳躍するものである。

また、『作陽誌：新訂訳文 上巻』には、このように記述されている。

建治元年七月十日、僧定乗は鎮守廟に於て護法神託を言う。寺僧書して軸と為し護法託宣と号す。すべて千数百字、皆不經の言なり。（『作陽誌：新訂訳文上巻』：383）

上記の記載から、この祭事は本来護法善神から託宣を貰うものであったと推測される。しかし現代では託宣を行うといった行動は見られない。

護法祭には、護法実の「お遊び」の最中にその進路を塞ぐ、邪魔をすといった行為を行った者は護法実に追いかけれ、護法実に捕まった者は死ぬと言いつた伝えられている。

これに対して、両山寺の住職は、邪魔をしてもお祓いをすれば死ぬことは無いだろうと語っている。一方因果関係は不明なものの護法実に対して不敬を行い、捕まってしまった人が後に死亡したという例はあるという。

本来、護法善神は仏教の守護神であるが、両山寺の護法神は「護法神本地文殊之像」であるため、仏ではなく神であるとの認識されている。そのため、護法実が毎日規定とされている事を忠実に守り、「精進潔斎」を行うことで護法善神に近づき、善神も護法実近づくと祭りの日の深夜にお遊びを行うことが可能になるという。

令和元年時点で護法祭を行っていた寺院は次の通りである。

- ・両山寺（岡山県中央町両山寺）
- ・清水寺（岡山県久米南町）
- ・両仙寺（岡山県久米南町）

また、過去に護法祭を行っていたのは下記の寺院である。

- ・恩性験寺（岡山県旭町上口 2019年時点で中止）
- ・一宮八幡神社（岡山県中央町和田北 1991年を最後に中絶）
- ・仏教寺（岡山県久米南町仏教寺 昭和30年代に廃止）
- ・豊楽寺（岡山県御津郡建部町豊楽寺 昭和20年代後半に廃止）
- ・泰西寺（岡山県久米南町弓削 大正時代に廃止）

この中で豊楽寺と仏教寺は隔年で交互に護法祭を行っている。また、泰西寺は大正3年に久米南町大字泰山寺にあった泰山寺と同町大字西山寺の西山寺が合併したもので、合併以前はそれぞれの寺で護法祭を行っていたという。

『作陽誌』には本山寺（柵原町定宗）でも毎年旧暦の7月7日に護法祭が行われていたという記録があるが、廃絶時期は不明である。

表1 護法祭を行っている、行っていた寺院一覧

現在行っている寺院	現在行っていない寺院
両山寺（岡山県久米郡中央町）	恩性験寺（岡山県旭町上口）
清水寺（岡山県久米南町）	一宮八幡神社（岡山県中央町和田北）
両仙寺（岡山県久米南町）	仏教寺（岡山県久米南町仏教寺）
	豊楽寺（岡山県御津郡建部町豊楽寺）
	泰西寺（岡山県久米南町弓削）
	本山寺（岡山県柵原町定宗）

これらの寺院、神社の中で最も古い歴史を持つとされているのが、両山寺の護法祭であり、『作陽

誌』に本山寺とともに祭りについての記述が確認されている。また、清水寺、恩性験寺、両仙寺、一宮八幡神社の護法祭は、近代以降に両山寺の護法祭を踏襲したものであり、祭りの内容も両山寺のものを踏襲している。

仏教寺、豊楽寺の護法祭は両山寺のものとは異なるものであったとされ、祈り憑けの際に両山寺のものとは異なる独特の唱え事を行う事や、護法実が両腕を固定し特殊な姿勢を取る事、「鳥飛び」と称されるステップがあった事等が特徴とされる。

護法祭には「鳥護法」と「犬護法」の2種類があると伝えられており、両山寺では、両山寺の護法祭は鳥護法で清水寺の護法祭は犬護法であるとされている。そのため、両山寺の護法実が高い木の上に登っても鳥であるため追いかけて来る。清水寺の護法実が堂の床下に逃げても犬であるため追いかけて来るという。

また仏教寺では、仏教寺は「鳥護法」で豊楽寺は「犬護法」であると伝えられている。しかし、犬護法であると両山寺から言われている清水寺では、両山寺こそが犬護法であり清水寺は鳥護法であると主張し、豊楽寺は仏教寺が犬護法であり、豊楽寺は鳥護法であると主張している。

これに対し、『美作の護法祭』で小嶋博巳は次のように述べている。

実際のところ、これらのいずれの護法祭においても、鳥の象徴性こそ認められるものの、犬護法と呼ぶべき象徴性を見出すことはできない。鳥護法と犬護法の相違を言い立てる伝承には自らを鳥護法の側に位置づけたいという、犬に対して鳥の優位性をにおわせる傾向がみられるもので、「犬」は似て非なるものの意で用いられた一種の別称とみることができよう。

しかしまた、犬を山犬ないし狼の意に解するときには、それも鳥と同様に神、ことに山の神の使役霊とみなすことが可能である。かなり早くに行事が廃絶したために今日、痕跡すらうかがうことができないが、本山寺の護法祭は、『作陽誌』がその護法実の憑霊の様を「咆吼忿嗔の状、獣属の如し」としている。あるいは「犬護法」の語は、本来、この本山寺の護法祭をさしたものであったのかもしれない

両山寺護法祭の変容

い。この推測が正しいとすれば、護法祭には
(1) 両山寺系 (2) 仏教寺・豊楽寺系 (3) 本山寺系の3つの系統があったことになろう。
(小島博巳『美作の護法祭』: 3)

小嶋は早くに廃絶した本山寺の護法祭が本来「犬護法」で本山寺、両山寺、仏教寺・豊楽寺の3つの系統が存在したと推察している。

以上が岡山県久米郡地域で行われている護法祭に関しての概要である。

2 両山寺について

両山寺は岡山県久米郡中央町にある二上山(689m)の山頂付近に位置している。二上山は弥山と城山という2つの山頂を有している。東の弥山からやや下ったところに鎮守である二上神社が鎮座しており、その下方に本堂と本坊が建っている。両山寺の本尊は聖観世音菩薩である。両山寺は高野山真言宗に属しており準別格本山の寺格を有している。

寺の由来に関しては過去の火災によってその縁起や文書が消失しておりほとんど不明であるとされている。また、元禄元年に編纂された『作陽誌』の新訂版である『作陽誌：新訂訳文 上巻』の久米郡北分寺院部には、両山寺について次のように記述されている。

当寺は大坪和東村に在り。府より三里半。縁起あり、其の文左の如し、

作陽城西南、久米北郡坪和郷、二上山両山寺は歴世遼去し未だ其の由来詳しからず。今ひそかに遺録を摘い旧聞を撈り推して以って其の開基を原ぬ、曩昔伝教大師たまたま此州にいたり二峰巍々たるに相う始めて法基を建てついに大門繁営の地と為るなり。それ名を設くるゆえんの者を校ぶるに一气既に動きて両儀を生ず。乾坤あり、陰陽あり、人に男女あり、獸に牝牡あり、翼に雌雄あり、神に内外二道あり、法に壺金両界あり、一巒に両峰の形体を備うるは、天地自然の妙容なり、故に山を二上山と名づけ、寺を両山という。其の名を得と謂うべきなり。かつ二仏を安置して本尊と為す。一は正観世音菩薩なり、一は

弥陀善逝なり。二山は二尊を現わし、現未二途の瞑暗を導かんと欲す。其意深きかな。又別に大明神の宝殿を建て此山の鎮守と為す。けだし明神は本地釈迦牟尼仏なり。其の後回祿(火事)あり靈宝靈物、旧記、縁起一時に消滅す。爾来星霜已に移り丹青痕を消し、ここを以って世人靈跡に子を識らず。おりしも密宗の僧来りて此に住むあり。絶を継ぎ、廢を興し寺院再び成る。嶺頭遠望滿眼衆山恰かも平陸の如し。南に備の海水を看、北に伯の大山を候み、西に峻岳の堆を連ね、東に播の辺境を窮む。坐して市塵の騒なく、歩けば飛雲の帰するを伴う。これにより以降三宝を恭敬し、真蜜を習得し造次顛沛にも怠慢なく、縑素一登し、直に当然の善所を得て長く向來の勝縁を締む庶幾この山の凡ならざるを知りて、法水の不朽に流れ燭光の無窮に挑ましめんと欲するなり。すなわち毫を振いて以って後覽に備う。寛文十三年癸丑に在り、八月日、作州大守源朝臣四位侍從、森氏長継臣、井上氏重政奉進す。(『作陽誌：新訂訳文 上巻』: 380)

これによると、両山寺の詳しい由来というのはわかっておらず、『作陽誌』の記録も遺録や旧聞で推測したものであるとした上で、両山寺の開基はるか昔に伝教大師が現在の二上山に法基を建て、台門の繁栄の地になった。その際、弥山、城山の二峰を金剛界、胎藏界と比定し、それが天地自然の妙容であるためこの山を二上山と名付け、寺の名前を両山寺としている。

『作陽誌』によれば、両山寺は伝教大師最澄が二上山の二峰を金剛界、胎藏界であるとしてその地に法基を開き、その後一度火災によって衰えたところに密宗の僧侶が再興したという経緯を持つ寺である。

また『作陽誌』の同條には、両山寺開基に関する異説も記されており、これによると空海が出雲杵築社からの帰路に泰澄の靈魂に導かれて金剛界、胎藏界の両界を有した観音大士遊嬉之地を二上山に発見したため、その場所に寺を開いたとある。

他にも寺伝では、和銅7年に泰澄によって天台宗、真言宗の二道場として開かれ、その後天台宗

が衰えていったため現在の真言宗の寺となったと伝えられている。

上記のように両山寺の起源については、様々な説が存在しており、また永禄8年に火災によって文献が焼亡したとされており、未だに詳しいことはわかっていない。

Ⅲ 祭事の調査

1 令和4年度における両山寺護法祭

本節では令和4年度に私が行った両山寺護法祭の調査に基づいて、令和4年度における両山寺護法祭について詳しく見ていきたい。

調査日および調査項目は以下の通りである。

- 8月7日 しめ縄張り、法螺貝、太鼓の練習
1回目、護法実お籠り開始
- 8月11日 法螺貝、太鼓の練習 2回目
- 8月14日 手火作成、祭り準備、祭事本番

ここからは令和4年度の調査の概要を述べる。

・行事のスケジュールについて

8月7日

午前8時00分 二上山両山寺境内に集合。
しめ縄を張る用の支柱に使用する竹を取りに行く。

午前9時00分 二上山の護法実お籠り巡回ルートにしめ縄を張りに行く合計7ヶ所

午前11時00分 解散

午後17時00分 太鼓、ほら貝の練習を開始

午後18時00分 護法実お籠り開始

午後18時30分 太鼓、ほら貝の練習終了解散

8月11日

午後17時00分 太鼓、ほら貝の練習

午後18時00分 解散

8月14日

午前8時00分 二上山両山寺境内に集合
手火を作成、提灯の取り付け等祭事の準備開始

午前11時30分 手火完成、一時解散

午後17時05分 本堂へ太鼓等の祭具を運ぶ。
本堂神勧請

午後17時25分 一時解散

午後20時00分 余興開始 盆踊り、バルーンアート、鶴丸太鼓等

午後20時30分 一番法螺貝

午後21時00分 二番法螺貝

午後22時00分 三番法螺貝

午後22時05分 役付き点呼

午後22時16分 護法実のお迎え、迎神行列

午後22時43分 護法善神社から本堂に帰ってくる。

午後22時45分 護法実の衣装替え

午後23時10分 戸神清め

午後23時23分 祈り憑け開始、手火に火を入れる。

午後23時38分 お遊び開始

午前24時05分 お遊び終了

午前24時08分 送神行列

午前24時50分 解散

・各日程の行事の詳細について

8月7日の明朝から祭事の準備が始まった。

7日は午前8時に二上山両山寺境内に集合し、しめ縄を張る支柱の竹を取りに両山寺から少し降りた場所にある竹藪へ行く。そこで14本の竹を採取し、採取した竹の下の方の枝を落として注連縄を張るための下準備をしておく。



写真1 注連縄の支柱に使う竹の採取（撮影 新名）

その後軽トラックの荷台に採取した竹を積んで両山寺に戻り、自作した藁縄と幣を携えて7ヶ所にしめ縄を張る。場所は二上神社鳥居前（両山寺本堂から向かって右側で本堂と本坊のちょうど真ん中辺り）、宮坂口（二上神社鳥居から弥山に向かう坂道を150mほど登った場所）、護法善神社祠

両山寺護法祭の変容

前、塩場入口（ショーバン7ツ池とも呼ばれ、7つある池への分かれ道）、龍智水池入口（ショーバン7ツ池の1つで最も南側に位置している）、弥山頂上、弥山頂上旧登り口（弥山山頂に登るための道）の合計7ヶ所である。



写真2 二上神社鳥居前に張った注連縄（撮影 新名）



写真3 弥山旧登り口に注連縄を張る様子（撮影 新名）

しめ縄は道の両端に竹の支柱を立て、2mほどの高さに藁で作成した縄をつけ藁縄の3ヶ所に幣をつける。この時、風雨によって注連縄の支柱である竹が倒れてしまわないよう、近くにある木と注連縄の支柱にビニールひもを使用し結びつける。護法善神社祠前、龍智水池口では近くに結ぶための木がないため支柱を支える用の少し短い竹を地面に挿し、また護法善神社前のみビニールひもを使用せず藁縄を使用した。

注連縄を取り付けた順番としては、二上神社鳥居前から始まり宮坂口、龍智水池入口、塩場入口、弥山山頂、護法善神社祠前、弥山山頂旧登り口の順番で行った。

また、弥山山頂では注連縄を張った後両山寺住職によって「御山頂上神勸請幣帛新調」を行い弥山の山頂に神を勸請する。最後に弥山山頂旧登り口に注連縄を張り終わると、二上神社鳥居前まで

戻り12時頃に終了し解散となる。

注連縄を張った同日の夕方17時から太鼓と法螺貝の練習を両山寺で行う。両山寺住職、丸王寺住職らと螺吹、太鼓、小太鼓打ちといった役付きの檀家が集まり、祈り憑けの際に行う演奏と、迎神行列や送神行列の際に行う演奏の練習を行い、この日はこれで解散をした。



写真4 太鼓と法螺貝の練習の様子（撮影 新名）

太鼓の打ち方は以下の通りである。

迎神行列、送神行列の際に叩く太鼓

ドン。ドン。ドン。ドン。ドン。ドン。ドン。
ドン。ドドドドドド。ドン。ドドドドドド。
ドン。ドドドドドド

これを繰り返し行う。

祈り憑けの際に叩く太鼓

ドン、ドン、ドン……（ゆっくりと）×20
ドンドン……（はやく）×20
ドッドッ……×10
ドンッ

これを繰り返し行う。

8月11日は17時から太鼓と法螺貝の練習を行った。また、この日は「精進潔斎」に向かう前の護法実が居たため、祈り憑けの際のリハーサルを行った。リハーサルは護法実を真ん中に座らせて、その周りで太鼓と法螺貝を鳴らして行うものである。

8月14日祭事当日は朝8時頃に両山寺境内に集合し夜の祭事の準備として、手火の作成と両山寺までの道のりに提灯を取り付ける作業を行う。

手火は両山寺本堂の隣にある薬師堂の軒下に置いてある乾燥した竹を長さ3mに切りそろえ4分

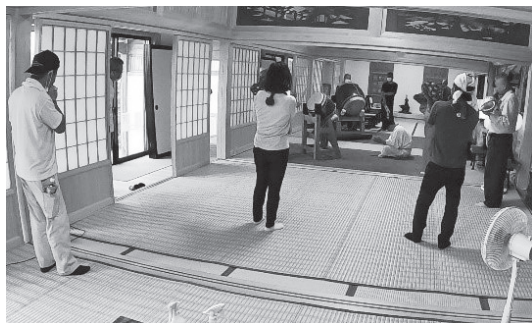


写真5 護法実を入れ折り憑けのりハーサルを行う
(撮影 新名)

の1に鉋や鋸で割る。これを1m程度に並べて3ヶ所に藁縄を使いつなぎ合わせる。その上に藁を敷きつめ割った竹の端材を入れて藁をくるむように巻いていく。巻いたものの外側を21ヶ所男結びと呼ばれる結び方で縛る。この21ヶ所を縛った後、最初に3ヶ所つないだ藁縄は取り除く。



写真6 鉋を使用し手火の作成に使う竹を割く
(撮影 新名)

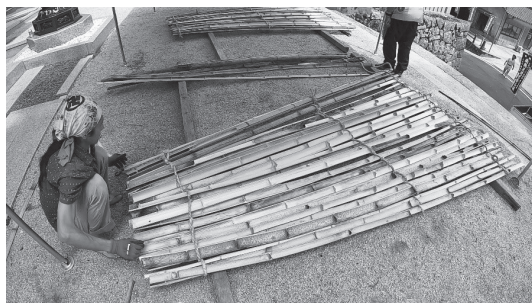


写真7 暖簾状に竹を並べる (撮影 新名)

完成した手火を両山寺本堂正面の向拝の両端の柱に縛り付けて完成となる。その後は11時30分に一時解散となる。

17時に太鼓、榊葉、紙手、サイカ棒を持ち本堂



写真8 並べた竹の中に藁を入れ巻いて手火にする
(撮影 新名)

へ向かう。その際、太鼓をたたき、ほら貝を吹きながら列をなして本堂へ向かう。その後本堂神勸請を行い一旦解散となる。これは本堂外陣から内陣に向け法螺貝と太鼓を鳴らし、短いお祈りを行うというものである。

20時ごろから鶴丸太鼓による太鼓演奏や地元婦人会による盆踊り、バルーンアートと余興が始まり、地元の住民が両山寺へと登ってくる。



写真9 一番螺 (撮影 新名)

またこれに並行して、本堂向かって左側の広場に螺吹らが集まり法螺貝を立てる。時間は、20時30分に一番貝、21時30分に二番貝を、22時00分に三番貝を立てる。

三番貝を立てたのち両山寺本堂へ役付きが集合し本堂外陣の照明が消され、暗闇の中で役配朗読が始まる。その際の役一覧は以下の通りである。

・役一覧

院代 (1人) 神灯持ち (1人) 螺吹 (10人)
前手火持ち (1人) 後手火持ち (1人) 大太鼓持ち (2人) 大太鼓打ち (2人) 小太鼓持ち (2人) 小太鼓打ち (2人) 紙手持ち (1人) 腰取り (5

両山寺護法祭の変容



写真10 鶴丸太鼓の演奏 (撮影 新名)



写真11 役配朗読 (撮影 新名)

人) 榊葉持ち (1人) 半畳持ち (1人) サイカ (8人)

なお例年地元の小学校から募集を行う、ケイゴと呼ばれる祈り憑けやお遊びの際に護法実周囲を取り巻く役職は今年の護法祭では新型コロナウイルス感染症対策の一環として、募集しないこととなった。

役配朗読が終わると、太鼓や法螺貝、サイカ棒等の道具を持ち、迎神行列が出発する。行列が本堂を出る際から太鼓を打ち鳴らし法螺貝を吹く。それに続くように列が形成される。



写真12 迎神行列 (撮影 新名)

列は本堂を出て薬師堂前を通り二上神社鳥居をくぐり御山へと入っていく。この時、「バラオン、サラオン」と大きな声で呪文を唱え続ける。これは本来ケイゴの役割であったが、今年はケイゴが不在であるためサイカが行っていた。また、この迎神行列の後ろには、地元住民等の祭事の見物客が並んでついてくるものとなっている。

行列が護法善神社に到着すると、先に護法善神社には最後の水行を終えて社殿に向かって拝む姿勢で護法実が待機している。

迎神行列が護法善神社に到着すると護法実に榊の葉を1枚啜えさせ、院代が護法善神社の社内に祀られてある金幣を取り出し護法実到手渡す。

護法実に金幣が手渡されると同時に護法実の足取りがおぼつかなくなる。ふらふらとしている護法実の腰を腰取がつかみ支える。ここで法螺貝と太鼓が鳴らされその後、護法善神社から迎神行列と同じように列になり、そのまま太鼓を打ち鳴らし法螺貝を立てながら本堂へと帰っていく。その際、護法実は腰取に支えられながら列の真ん中の紙手持ちと榊葉持ちの間に入ることになっている。

本堂へ到着すると護法実の衣装をそれまで着ていた白い衣装から、黒い装束へと着替えて尸人清めを行う。その後境内の明りがすべて消され、本堂正面の向拝の両柱に取り付けられている手火が取り外し、境内の十王堂横と本堂前の二上杉の横に移動させ火をつける。

祈り憑けが始まると太鼓と法螺貝の演奏が始まり真ん中に10分ほどで祈り憑けが終わりお遊びが開始される。両山寺本堂から勢いよく護法実が飛び出す。その横に腰取が「ギアアテイ、ギアアテイ」と叫びながら走りついていく。



写真13 お遊びをする護法実 (撮影 新名)

本堂から出たのち、正面の階段を下り十王堂横にある手火の上を飛び越えそのまま鐘楼門の手前にある休み石へ向かう。休み石では腰取りの1人が先に座っており、その上に護法実が座る。その座っている護法実の足を揉みながら、修験者の1人が護法実から護法善神が離れないようにお祈りを行う。

それが終わると護法実はいみ石から立ち上がり、今度は本堂の方向へと走り出す。先ほど下った階段を上り今度は本堂向かって右側にある休み石の方向へと向かい、先ほどと同じように腰取りが先に座っている上に座り足を揉まれながらお祈りをされる。

それが終わると今度は二上杉の裏へ回るように移動し、そのまま本堂向かって左側にある休み石の方向へと走り先ほどまでと同様に先に座っている腰取の上に座り、足を揉まれながらお祈りを受ける。

その後本堂の方へと向かいながらお遊びを行い、本堂へと入っていく。その中でも修験者によって護法実から護法善神が離れないようお祈りを行い、最初と同様に本堂から出てお遊びを行う。

この一連の流れを走り回り、たまにルートを変更しながら6回程度行い、本堂へ戻り聖水を飲む。聖水を飲んだ時に護法実から護法善神が落ちるとされている。その後院主によって加持され聖水を振りかけられたお清めを受け、紙手と衣装を脱ぎお遊びが終了する。

お遊びが終了した後、護法実には本堂へと役付きが集合し送神行列が行われる。少し休憩を取った後に迎神行列と同じように列を成し太鼓を打ち法螺貝を鳴らしながら護法善神社まで歩く。この時も迎神行列と同様に送神行列の後ろを観客たちがついてくる。

護法善神社へ到着後、金幣を院主が護法善神社の社内に収め、太鼓を打ち全員でお祈りを行い護法祭が終了する。

2 これまでの護法祭

これまでの両山寺の護法祭がどのようなものであったかを『両山寺護法祭』の記述に基づいて概述しよう。

護法実の動きについて

- ・護法実が祭事の一週間前から両山寺に登る
- ・白衣を着て護法善神の掛け軸を本坊書院に祀り、護法善神を勧請する
- ・弥山山頂に竹を2本建て注連縄を張り幣を付けて山頂に神を勧請する
- ・宮坂口、社前入口、塩場入口、龍智水池口の4ヶ所に山頂同様に竹を2本立て注連縄を張り幣を付ける
- ・祭事の日まで水行と巡拝を行う

手火の作成について

- ・原材料の乾燥した竹、麦わら10束、藁縄、乾燥した松の木(肥え松)を用意する
- ・乾燥した竹を鋸で長さ3mに切りそろえ、鉋で4つに割る
- ・割った竹を1mほどに並べ、簾のように3箇所を藁縄を使ってつなぎ合わせる
- ・麦わらをこの簾でくるむように包んで巻いていく。麦わらの中に細かく割った肥え松を混ぜる
- ・巻いたものを藁縄で21ヶ所男結びで縛っていく
- ・21ヶ所縛った後、最初につなぎ合わせで使った藁縄を切って取る
- ・これを2本作った後、本堂正面の向拝の両側の柱に太い方を上にして縛る

祭事について

- ・諸道具を本坊に揃え山主が火打石で火花を出し道具のお清めを行う
- ・本坊の玄関に道具を持って集合し、太鼓の合図とともに法螺貝を立て、本堂まで行列をずる
- ・本堂に到着した後、厨子に向かって右側に簡単な祭壇を設け、その上に紙手、護法実衣装を置き、その奥に榊葉を置く
- ・本堂外陣で内陣に向かって太鼓を鳴らし、法螺貝を立て短いお祈りが行われる
- ・準備が終了し一旦解散となる
- ・午後7時頃に両山寺の本坊に立螺師が集合する
- ・立螺師が山伏の衣装を着け、午後9時30分に両山寺本堂前で法螺貝を立てる(1番螺)
- ・同様に午後10時に両山寺本堂前で法螺貝を立てる(2番螺)

両山寺護法祭の変容

- ・同様に午後 10 時 30 分に両山寺本堂前で法螺貝を立てる（3 番螺）
- ・3 番螺を聞いて本堂内陣へ役付きの人が集合する。役配の朗読を行う
- ・卍の手ぬぐいが配られ、それで鉢巻をする
- ・各道具を持ち、行列を成して護法善神社へと向かう。迎神行列について
- ・護法善神社で護法実と合流し榊の葉を啜えさせる
- ・護法善神社から金幣を取り出し護法実到手渡す
- ・護法実が行列に加わり、修験者らによる短い祈りを済ませ両山寺本堂へ向かう
- ・本堂内陣に護法実が金幣を山主に手渡し、榊の葉を取る。山主は金幣を神前に安置する
- ・護法実が着ていた白衣を脱ぎ、黒い装束に着替え、紙手を頭にかぶる
- ・山主、護法実、その他役付きの順番で切火水を飲む
- ・半畳の上に結跏趺坐をとり、院主が切火水を打ちながら呪文を唱え護法実を清める
- ・内陣と外陣の仕切りが取り払われ、切火水を打ち丸王寺住職が経を唱えて外陣を清める
- ・本堂前広場と山門前広場に手火が運ばれ、火をつける
- ・本堂が関係者だけになり、護法実に護法善神を乗り移らせるお祈りが始まる
- ・護法実が西を向いて座り、その周りをケイゴが取り囲む
- ・鎮守総代が護法実に榊葉を手渡し、護法実が榊葉の下側を両足の裏で挟むようにして持つ
- ・太鼓と法螺貝を鳴らし、ケイゴが「ギャアテイ、ギャアテイ」叫びながら護法実のまわりをゆっくりと右回りで回り始め、それに合わせて護法実も榊葉を右回転させる。山主は内陣の護法善神の前で秘法を修めている
- ・太鼓の音が段々と早くなり、それに合わせ、ケイゴが護法実のまわりを回る速さも護法実が榊葉を回す速度も上がっていく。その後再びゆっくりになり、これで一祈りとし護法善神が憑くまで何回か行われる
- ・20 分ほど経つと榊葉の回転が小刻みになり、前後に揺れだすと護法実に護法善神が乗り移る
- ・鎮守総代が護法実から榊葉を取りあげ、護法実がパッと立ち上がる。腰取が両端の腰ひもをつかむ
- ・護法実が表に向かって走り出し、それにケイゴや手火持ちがついて走り、お遊びが始まる。
- ・護法実が手火の炎の上を飛び越え境内を走り回りながら、腰取が先に座っている休み石に来て、腰取の膝の上に腰を下ろす
- ・山伏が休んでいる護法実に呪文を唱え、ケイゴがその周りを取り囲み「ギャアテイ、ギャアテイ」と呪文を唱えながら護法実の足や肩をほぐす。また休み石ではなく、本堂外陣の半畳の上に伏すこともある
- ・これを幾度か行った後に最後に本堂内陣に走り込み仏前の切火水を飲み、お遊びが終了する
- ・切火水を飲み終わった護法実は院主から加持を受け切火水をかけられながら清められる
- ・お清めが終わった後、紙手を取り黒装束を脱ぐ
- ・迎神行列と同様に列を成して護法善神社へと送っていく
- ・院主が護法実から金幣を受け取り、護法善神社に納める
- ・太鼓を打ち、錫杖を鳴らしながら全員でお祈りを行い、送神が終わり本堂へ帰る
- ・山主が祭事の終了を告げ、護法祭が終了する。これを見ると先に記した令和 4 年度のものとは比べても祭事に関してはさほど違いは無いように感じられる。変わった点として挙げるのであれば、注連縄を張る数と法螺貝を鳴らす時間、ケイゴの有無といったものくらいではないだろうかと考えられる。

IV 護法祭の変化

1 過去の護法祭との比較

本節では昭和末期、平成、令和での護法祭の比較を『両山寺護法祭』『美作の護法祭』『護法祭式奉供銘記』および令和 4 年度の調査資料を使用しておこなう。

比較の対象は、法螺貝を立てる時間、注連縄張

り、役付きの数と人数、護法実に関しての4点とする。

最初に祭事の開始を知らせる法螺貝を立てる時間についてみていく。

護法祭では法螺貝を「吹く」ではなく「立てる」と言うため、本節でも立てるという表現を用いる。法螺貝は護法祭の祭事の開始を知らせるために立てられる。祭事が始まる時間になると、両山寺本坊から立螺師が本堂前の広場へと集合し、本堂向かって左側の広場から鐘楼門の方向に向かって立てる。これを3回行った後に、護法祭が始まるという事になっている。

法螺貝を立てる時間が変更された具体的な年が不明であるため、ここでは昭和末期、平成、令和の元号を使用した区分けで比較を行うこととする。

まず昭和末期についてであるが昭和55年に発行された『両山寺の護法祭』によると、一番法螺貝は21時30分、二番法螺貝は22時00分、三番法螺貝は22時30分となっており、30分おきに法螺貝を鳴らすようになっていく。しかし、平成に入ると、一番法螺貝は21時30分、二番法螺貝は22時30分、三番法螺貝は23時00分と、一番法螺貝と二番法螺貝の時間が30分長くなっており、その結果として三番法螺貝の時間が30分遅い23時00分となっている。

また、令和4年度は新型コロナウイルスの流行を鑑みて、一番法螺貝を20時30分、二番法螺貝を21時00分、三番法螺貝を21時30分と、平成より全体を1時間早く行うように変更を行っている。

この昭和末期から平成にかけての法螺貝の時間変更にはどのような原因があるのだろうか。これに関しては、鶴丸太鼓という外部から呼んだ者による余興を行うようになったためではないかと考えられる。

昭和の頃は余興といっても地域内の婦人会の盆踊りといった、いわゆる身内といった人たちによるものであったが、現在では鶴丸太鼓を外部から

呼んでいる。

21時30分から22時00分までの30分では余興を途中で止めてしまう恐れがあるため、時間を30分伸ばし1時間にしたのではないかと考えることができる。

また、両山寺の住職は20年前頃から鶴丸太鼓を呼ぶようになったのではないかと語っていることから、平成10年頃に2番法螺貝の時間を30分伸ばしたのではないだろうかと考えられる。

また新型コロナウイルス流行の関係で、令和4年度から法螺貝の時間をそれまでの時間から全体的に1時間早めているが、流行が落ち着いた後は法螺貝の時間をもとに戻す予定ではあるという。

次に注連縄を張る場所と数についてみていこう。両山寺護法祭で注連縄は神前などに不浄のものが入り込まないように張るものであるとしている。

『両山寺護法祭』では、以下の場所に注連縄を張っている。

- ・宮坂口（本堂と本坊の間に弥山へ向かう坂道があり、その道を上った後に護法善神社に行くための分かれ道がありその分かれている場所）
- ・社前入口（護法善神社の祠前）
- ・塩場入口（塩場池、ショーパン7つ池とも呼ばれる7つの池があり、その池への分かれ道）
- ・龍智水池入口（塩場池の1つで、龍王池と呼ばれる池でその水の事を龍智水と呼ぶ。7つ池の中で一番南の道路に近い場所にある）
- ・弥山頂上

しかし、令和4年度で確認したところ以上の5ヶ所に加えて新しく以下のところにも注連縄が張られている。

- ・二上神社鳥居前（両山寺本堂、薬師堂から向かって右に20mほどの場所）
- ・弥山頂上への旧登り口

それでは注連縄が5ヶ所から現在の7ヶ所に増えた時期を考えてみることにしよう。

『両山寺護法祭』の時点では5ヶ所であると書かれている。しかし、『美作の護法祭』を見てみると、ここでは7ヶ所であると書かれている。

『両山寺護法祭』は平成3年までの調査であり、『美作の護法祭』は平成5年の報告書であるため、平成3年から平成5年の2年の間に注連縄を張る

表2 法螺貝の時間比較

	昭和末期	平成	令和
1番法螺貝	21時30分	21時30分	20時30分
2番法螺貝	22時00分	22時30分	21時30分
3番法螺貝	22時30分	23時00分	22時00分

両山寺護法祭の変容

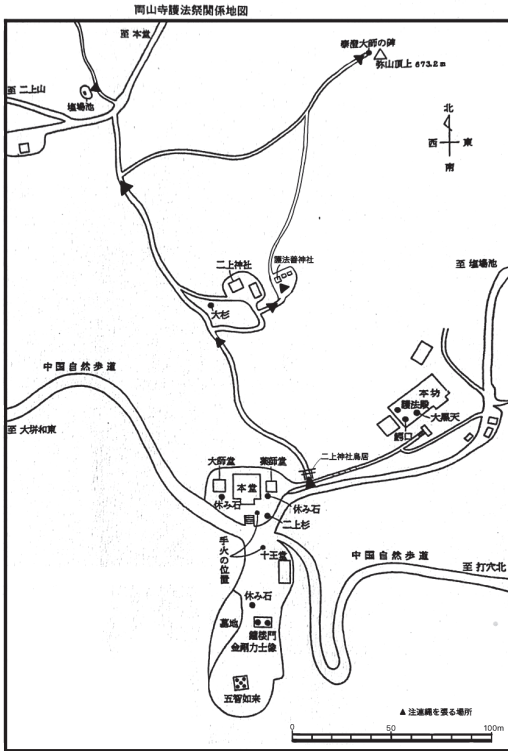


表3 注連縄を張る場所

場所が5ヶ所から7ヶ所に増えたのだらうと考えられる。

何故、注連縄を張る場所が5ヶ所から7ヶ所に増えたのかを考えていく。

まず、注連縄を張る理由であるが、両山寺によると、ここでは注連縄は清い世界と俗の世界を分けるために張っているとされている。そのため、注連縄を張る場所は塩場池の入口や護法善神社の社の前といった場所に張られている。

それを踏まえたうえで、二上神社鳥居前に新しく張られるようになった理由を考えていく。

鳥居とは、神社本庁では次のように認識されている。

鳥居は神社を表示し、また神社の神聖さを象徴する建造物ともいえます。鳥居は神社の内と外を分ける境に建てられ鳥居の中は神様がお静まりになる御神域として尊ばれます。(『鳥居について』神社本庁HP)

このことから神社の内外、神聖な領域とそれ以

外を分けるものとして鳥居が設置されているとわかる。

鳥居があるのであれば、新しく注連縄を張る必要はないとも考えられるが、この鳥居はあくまで二上神社の鳥居である。そのため、二上神社の鳥居とは別で護法祭のための注連縄を張る必要があると考えたのではないだろうか。

また、二上神社鳥居は弥山山頂へ上るために使われており、迎神行列や送神行列でもここから護法善神社へと入っていく入口である。そのため、この場所に新しく注連縄を張るようになったのではないだろうかと考えられる。

次に弥山山頂への旧登り口に新しく張られた注連縄について考えてみよう。

御山頂上への旧登り口は旧とはいえ、弥山の頂上へつながる道であることには変わりない。また、弥山の頂上では「御山頂上神勸請幣帛新調」を行い、山頂に神を勧請しているため、そこにつながる道の入口に注連縄をするという事を地元では自然なこととみなしているのではないだろうか。

それではここからは、役の数と役付きの人数についての比較を行っていくことにしよう。

役とは、両山寺の護法祭を行う際にその祭事の準備や儀式等を行う者たちの事であり、両山寺の檀家の一部の家が世襲制で行ってきたものである。

『護法祭式奉供銘記』に記録されている役の数と、令和4年度の役職者の人数の比較を行ってみたい。

昭和54年時点では、役の数と人数は15役77人、平成5年の場合役の数と人数は14役69人、平成12年では14役62人、平成25年を見ると14役41人となっている。令和4年の役付きは14役38人であった。また、これに加えてケイゴと呼ばれる地元の小学校等から募る役職があるのだが、これは『護法祭式奉供銘記』には記録されていないため、ここでは役の数としては入れていない。

これを見ると、ここ40年ほどで役付きの人数が3分の2から半分程度にまで減少しているという事がわかる。

また、昭和54年時点では添サイカと呼ばれる役職があったと記録されているが、現在ではほとんど見る事ができない。

次に、役職ごとの人数を見ていく。役職の一覧

は以下の通りである。

院代、神灯持ち、螺吹。手火持ち、後手火持ち、大太鼓持ち、大太鼓打ち、小太鼓持ち、小太鼓打ち、紙手持ち、腰取り、榊葉持ち、半畳持ち、サイカ、添サイカ

このうち院代、神灯持ち、半畳持ち、紙手持ち、榊葉持ちにあたる役職の人数は昭和、平成、令和の各区分においても1人であるため、ここでは扱わない。

螺吹は昭和54年では18人、平成5年では16人、平成25年では10人、令和4年では10人となっている。平成25年から令和4年にかけて螺吹は増加も減少もしていない。

腰取については、昭和55年では24人と、役付きの中では人数が一番多かったにもかかわらず、平成25年では4人、令和4年では5人と、大幅な減少が起きている。

そのほかの役職に関しても、手火持ち、後手火持ち、大太鼓持ち、小太鼓持ち、大太鼓打ち、小太鼓打ちにも人数の減少がみられる。

また、添サイカに関しては役の人数が0人になっており、『護法祭式奉供銘記』には書かれなくなっているが、これに関して添サイカはサイカの役が8人までと決まっているため、それ以上にあふれた者を添サイカとして役をつけているのではないかと地元では考えられている。

このように役の数こそ変化は少ないものの、役付きの人数は大幅に減少していることがわかる。では何故このように減少していったのだろうか。

役付きは本来世襲制であるとされているが、子供や孫に役を継がせたくないといった家や、子供が就職や進学といった理由によって市外、県外に出て行ってしまうという事によって世襲ができなくなった家が増えたという。

また、両山寺檀家地域の人口減少、少子高齢化が進行しているというものが挙げられる。

昭和55年から平成22年までの両山寺の檀家が多い美咲町の人口の推移を見てみると、20029人から15642人と約5000人の減少がみられる。また令和4年度の人口調査ではさらに減少して13417人となっている。

世代別の人口推移を見ても昭和55年時点で75歳以上の後期高齢者と呼ばれる世代の人口が1479人であるが、平成22年では3292人と倍以上に増えている。高齢者と呼ばれている65歳以上の人数も3787人から5522人と増加している。また、15歳以上64歳以下の人口は昭和55年の12779人から8352人と3分の1ほど減少している。

こういった、人口の減少、高齢化といったものが両山寺の檀家のある地域で起こっているために、あるいは役付きの世襲ができない家が増えたという事によって、役付きの人数が大幅に減少しているのではないかと考えられる。

また、令和4年では地元の小学校等から募集を

表4 役配ごとの人数比較

	昭和54年	平成5年	平成12年	平成25年	令和4年
院代	1人	1人	1人	1人	1人
神灯持ち	1人	1人	1人	1人	1人
螺吹	18人	16人	14人	10人	10人
前手火持ち	2人	2人	2人	1人	1人
後ろ手火持ち	2人	2人	2人	1人	1人
大太鼓持ち	3人	2人	1人	2人	2人
大太鼓打ち	2人	3人	3人	2人	2人
小太鼓持ち	3人	5人	3人	2人	2人
小太鼓打ち	2人	3人	4人	3人	4人
腰取	24人	24人	26人	4人	5人
半畳持ち	1人	1人	1人	1人	1人
榊葉持ち	1人	1人	1人	1人	1人
サイカ	8人	8人	8人	9人	8人
添サイカ	1人	0人	0人	0人	0人
合計人数	77人	69人	62人	41人	38人

両山寺護法祭の変容

行うケイゴの役の募集を中止した。これは新型コロナウイルスの流行とその感染防止対策のためであり、流行が収まれば再度募集をかける予定であるとされている。

最後に護法実について見ていく。ここでは、護法実の「精進潔斎」の日数と「お遊び」に関して比較を行いたい。

護法実は尸人のことで、護法祭においては護法善神の依りとなる人の事である。護法実は他の役と違い世襲制ではなく、二上護法奉賛会の会議によって選ばれており、選ばれる条件として性格が温厚で真面目な人で、悪事を働いて刑罰を受ける、またはそれに類することを行った事のない人間で、選ばれた場合に信心や信仰上の義務感から行動をする人間であるという条件がある。

ここからは、護法実の「精進潔斎」の日数について見ていく。

「精進潔斎」とは、護法実が祭事の1週間前から両山寺に登り、水行、順拝等を行うというものである。

水行は、両山寺本坊から龍智池に通い、身心の清浄を念じ龍智池の水を21回かぶるというもので、これを1日10時、12時、14時、22時、0時、2時の昼夜3回ずつの合計6回行い、水をかぶった後に法螺を立てるという行動である。

順拝は弥山山頂→護法善神社→本堂→本坊内護法殿の順番で経を唱えて法螺貝を立てるというもので、1日1回行う。また、順拝、水行を行っている際は護法実は他人と言葉を交わすことを禁じられている。

この水行と順拝を祭事の1週間前から毎日行うのが「精進潔斎」である。

それでは、「精進潔斎」の日数について見てみよう。

護法実の「精進潔斎」の日数はその年数によって変化している。先代の護法実は護法実の役になって最初の数年は「精進潔斎」を本来の日数である7日間行っていたが、4年程護法実の役目を行った後に、「精進潔斎」の日数を7日間から4日間に減らしたという。

これは、『美作の護法祭』によると、

祭事が旧暦7月14日であるから、かつては

1週間前から精進潔斎の期間にはいっていたことになる。しかし、今日ではそういうわけにもいかないのか、令和4年度の護法実である紙谷照夫氏（中央町打穴上）の場合は祭式4日前の新暦8月10日朝から潔斎に入るようである。また紙谷氏の場合、護法実になるのは今年で18年目という大ベテランでもあり、精進潔斎の期間を短くできるのはそのせいもあるらしい。（『美作の護法祭』：4）

とあり、短くできる理由は不明なものの、何年も護法実の役目を行っていれば「精進潔斎」の期間を短くすることができるという。

また令和4年度でその任にあたった護法実は、既に7年間護法実を行っており、そろそろ「精進潔斎」の日数を7日から4日にしても良いのではないかと住職から言われている。そのため、この先数年で「精進潔斎」の日数が変化するのではないかと考えられる。

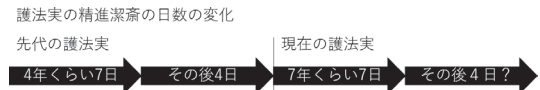


表5 精進潔斎の日数変化

次に、護法実の「お遊び」について見ていきたい。

「お遊び」は護法実には護法善神を祈り憑けした後に行う、両山寺の境内を疾走、跳躍するものである。その「お遊び」の最中の護法実の紙手を引っ張るなどして邪魔した者は、護法実に追いかけれ捕まった者は死んでしまうといった言い伝えもあるものである。

私が行った令和4年度の調査、動画投稿サイトに投稿された、平成25年度の動画と平成26年度の動画の3種類の資料を比較することによって、その変化をみていきたい。

比較を行うにあたって、まず明らかにしておきたいのは、平成25年度、平成26年度は先代の護法実が走っているが、令和4年度は新任の人が護法実として走っているということである。

はじめに「お遊び」で護法実が行う基本的な行動を次の3行動であると仮定する。

- ・両手を広げるようにして疾走を行う。（「鳥護法」と呼ばれているため。）
- ・手火の上を飛び越える。（広報誌等で手火を飛び越える写真が多く使われ、また多くの年でその行動がみられるため。）
- ・休み石、もしくは本堂内にある半畳に伏して休む（両山寺の境内に休み石が存在し、報告書等にもその行動が書かれているため。）



写真14 休み石（撮影 新名）

これらの3要素を過去に投稿された動画や令和4年度の調査記録で確認していきたい。

それではまず、令和4年度の護法祭での「お遊び」を取り上げてみよう。

最初に本堂を飛び出し正面の階段を下り、両腕を広げ鳥のように疾走し十王堂横の手火を飛び越えてそのまま鐘楼門の手前側にある休み石へと座った。

休憩が終わると今度は十王堂の横を走り本堂前の階段を駆け上がり、本堂向かって右側の休み石へと座った。

その後二上杉をぐるっと回り、本堂向かって左側の休み石へ座り修験者らによってお祈りを受けた。

休み石から立ち上がり、本堂前の広場を疾走した後本堂へ入り外陣にある半畳に伏して修験者によるお祈りを受ける。

また、時折本堂前の階段を駆け下りるのではなく、薬師堂前を通り二上神社鳥居前を通り、道路に飛び出し広間の方へ走っていくこともあった。

基本的にはこれを繰り返し30分程度行い「お遊び」は終了した。

次に、動画サイト等で見ることのできる「お遊

び」の動きを見ていきたい。

まず、平成25年度の動画では「お遊び」が始まって護法実が本堂から飛び出し、正面の階段を駆け下りて、手火の横を通りぬけて鐘楼門の手前側ある休み石の方向へ向かっていることがわかる。

次の場面では鐘楼門の手前側の休み石の方向から広場の中心辺りを通り、手火を横切って階段の方へ向かいながら、広場を縦横無尽に駆け回っている。

平成25年度の動画では、その後の場面でも手火を飛び越える姿は確認できなかった。

また次の場面では十王堂へと突っ込む様子が撮影されている。これは、令和4年度の調査では見ることができなかった動きである。しかし、この動画からは護法実が両腕を広げて走っている様子をうかがうことはできない。

次に平成26年度のものを見ていきたい。

最初十王堂横の手火の上を飛び越えることなくその横を通って、鐘楼門手前側の休み石へと向かっている。また、その後の場面で手火の上を通る場面も見られるが、その時も炎がついていない反対側を歩くようにして飛び越えている。また、かろうじて両腕を広げて疾走しているようにも見えるが、基本的には両隣から腰や腕を支えられながら「お遊び」を行っている。

動画投稿サイトに投稿されているものは、ところどころカット編集を行っており、「お遊び」を最初から最後まで見て比較することはできないが、確認できる範囲で比較を行うと次のようになる。

表6 基本のお遊びの行動

お遊びの基本行動	平成25年度	平成26年度	令和4年度
手火を飛び越える	×	△	○
腕を広げて走る	×	×	○
休み石、半畳に伏して休む	○	○	○

休み石に座るという行動は、令和4年度、平成25年度、26年度に共通して見られる行動である。一方、手火を飛び越える、手を広げて走るという行動は、各年で異なっている。

では何故このような変化が起きたのだろうか。

手火を飛び越える、飛び越えないに関しては、護法実の年齢も関係してくるのではと考える。平成25年度の時点で護法実の年齢は75歳であり、年

両山寺護法祭の変容

齡的に炎の上を飛び越えるのは厳しかったのではないかと推察する。

そもそも何故護法実が手火を飛び越えるのか。

『修験道の近代化の問題』で引用されている『神変』において長谷寶秀は次のように言う。

従来の修験者を見るに、無智にして協議の意得なき者十に七八を占め、その品性陋劣にして無信狡獪なる者は火渡り湯探りの業を作し効験を驕りて愚民を誑惑し、甚しきは法に托して貪り法廷の審問を受くる者あり…
如上の弊害を除くことは現今修験道に於ける焦眉の急なりと信ず（『神変』第9号：39）

ここで長谷は、修験者が火渡り湯探りを行って民衆を惑わしていたと語っている。このことから、民衆は火渡りを行う事ができるという事と、人ならざる力を持つという事を同義にみていたという事がわかる。

両山寺の護法祭においても同様に、観衆は手火を飛び越える護法実には護法善神が憑いていると見なしていたと言えるだろう。

本来ならば、護法実が手火を飛び越えるべきであった。一方で75歳という高齢で燃え盛る炎の上を飛び越える無茶を行うのはなかなか難しい。

この75歳の老人はこれまでに何年も護法実を行ってきており、幾度となく手火を飛び越える姿を地元の人に見せてきた。観客にも護法実が力を持っていることは周知の事実となっていたのだろう。そうであれば、手火を飛び越えて人ならざる力を持っている事を示すことは必ずしも必要とされない、そのように考えられるのではないだろうか。

2 先行研究

両山寺護法祭に関しては、昭和後期や平成初期には『美作の護法祭』や『両山寺護法祭』といった、教育委員会が作成した護法祭の報告書や、豊島修の『美作の護法祭りとは修験道』（昭和56年）や鈴木照英の『山岳信仰・修験道とシャマニズムの関係—護法飛びの考察をめぐって』（昭和36年）といった研究書が発表されている。

しかし、平成12年以降、両山寺護法祭資料や論

文はほとんど発表されていない。

その少ない論文の中で、護法祭の変化について取り上げた、セルモ・コリーヌの『護法祭：民俗学の視点からみた現代における昔からの奇祭—その存続のための変化—』を紹介したい。

- ・護法祭の客層が変化してきている
- ・昔は地元の人だけだったが、よそからの客もくるようになってきた
- ・元々は地域の人々が子供のころから護法祭に参加し、儀礼を代々伝えていた
- ・現在では檀家全員が儀礼を知っているわけではない
- ・よその観客は護法祭に関する知識もない
- ・この新しい状況に適合するため、マイクを使用し儀礼の各段階を説明するようになった
- ・「お遊び」の不浄性の解釈を拡大した
- ・よその人は本来の不浄性を知らない
- ・「お遊び」の最中の護法実の邪魔をするといった、その場での態度に不浄性の解釈を広げた
- ・この2つの変化によってよそから来る人が一時的にコミュニティに参加することができる
- ・盆踊り、太鼓の演奏、籤など、護法祭とは関係ない演劇を入れている
- ・演劇を入れることで儀礼の前に観客を退屈させないようにしている
- ・護法祭は昔、1年に唯一とっていい行事であった
- ・娯楽が増えた現代では護法祭に人を呼ぶための手段が必要になった
- ・護法祭の演劇化は参加者拡大の結果である

コリーヌ論文では、時代の変化に伴い護法祭の観客層や地元の人との関わり方が変化してきた。そこで彼らをコミュニティに一時的に参加させるために、マイクを使用しての儀礼の説明を行ったり、籤や太鼓を使つての演劇化を図ったりといった施策を講じているという。

令和4年度の調査でも、迎神行列の際にマイクで「カメラのフラッシュを焚かないでください」とアナウンスがされたり、護法実が護法善神を祈り憑けし、本堂から飛び出した際にも「ただいま、護法実が本堂から飛び出しました」とアナウンスがあつたりと、地元の間で祭事に慣れ親しんだ人間からしてみれば、当たり前とも言つてよいこ

とをマイクでその場にいる全員にわかるようアナウンスを行っていた。

この事からも、コロナ論文で言及している護法祭の観客層の変化とそれに伴って、祭のありかたの変容がしていることは明らかである。

V 終わりに

最初の調査を行った際に、両山寺住職から護法祭に変化はないと伺った。

両山寺護法祭の変化していない点として、役の数や護法実の精進潔斎の内容、儀礼としての「お遊び」等が挙げられる。

役の数に関しては、役職ごとの人数は年々減少しているが、添サイカを除いて役職自体が無くなっているという事は無い。また添サイカに関しても、その役がサイカの数か8人までで余ったサイカを添サイカに割り振っていたという事から、今後サイカの数が増えた場合に再度登場するだろうと考えられる。

精進潔斎の内容に関しても、日数の変化はあるとしても、水行や勤行を行い食事の内容や他人との会話が禁止されている等、その内容に変化は見られない。

「お遊び」は個々の行動には変化があっても、毎年寺院の境内を疾走跳躍するという事に変化は見られない。

一方、本論文でも取り上げたように、注連縄の場所が5ヶ所から7ヶ所に増えていた事、法螺貝を立てる時間が変化していた事、精進潔斎の日数が7日から4日に変化する事、護法実の「お遊び」の行動に変化がみられている事等、護法祭には時代の変化や情勢からなる変化が起こっている。

さらに、コロナ論文が指摘するように、護法祭の場で、行事について丁寧に説明したり、祭とは直接には関係ない要素を取り入れた演劇化が図られている。

では何故、護法祭の関係者は「変化がない」と言っているのだろうか。

本論文で見られた変化はどれも、護法祭の関係者にとっては祭事の本質的なものではなかったのではないか。そのため客観的には護法祭は変容してると考えられても、彼らは「変化はない」と言っ

ていたのだろう。

今後、新型コロナウイルスの流行が収まったとしても、それによって起きた変化は残り続けるかもしれないし、他の要因によって変化が起きるかもしれない。そういった時代に合わせた変化を伴いつつ、護法祭は「変わらないもの」として、今後も続いていくのではないだろうか。

参考文献

- 『美作の護法祭』1994年 中央町、久米南町、旭町教育委員会
- 『両山寺護法祭』1992年 中央町教育委員会
- 『両山寺の護法祭』1980年 二上鎮守護法祭記録保存委員会
- セルモ・コリーヌ「護法祭：民俗学の視点からみた現代における昔からの奇祭－その存続のための変化－」2008年 お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際情報伝達支援スキルの育成」事務局
- 『美咲町人口ビジョン』2015年 美咲町
- 『住職による護法祭の覚書』作成年不明 作成者 井上観真
- 『護法祭式奉供銘記 平成5年』1993年 両山寺
- 『護法祭式奉供銘記 平成12年』2000年 両山寺
- 『護法祭式奉供銘記 平成25年』2013年 両山寺
- 『護法祭式奉供銘記 令和4年』2022年 両山寺 長尾勝明、正木輝雄著 矢吹金一郎校訂『作陽誌：新訂訳文 上巻』1912年 日本文教出版（国会国会図書館デジタルコレクション 2022年1月20日閲覧 <https://dl.ndl.go.jp/pid/3012816/1/202>)
- 長谷寶秀「修験道について」『神変』1910年 聖役協會文書傳道部（金本拓士「修験道の近代化の問題」2000年による。2022年1月26日閲覧 <https://chisan.or.jp/wp-content/uploads/2019/11/user-pdfD-gendaimikkyo-13pdf-06.pdf>
- 『鳥居について』神社本庁 HP 2022年1月6日閲覧 https://www.jinjahoncho.or.jp/omairi/jinja_no_namae/torii
- 投稿者 サンタクルス santa cruz『日本の奇祭 護法祭 ～後編～』2013年9月15日投稿

両山寺護法祭の変容

2022年1月6日閲覧 https://youtu.be/_N-L-Stdcj4
投稿者 白川晃太郎『護法祭 日本の奇祭 両山寺

岡山県久米郡美咲町』2014年8月20日投稿
2022年1月6日閲覧 <https://youtu.be/IOynldsI-uk>